

(4) 両生類・爬虫類

レッドデータブック改訂に際し、2015年から香川県を5地区に分け、高松地区(2015)、中讃地区(2016)、西讃地区(2017)、東讃地区(2018)、島嶼部(2018)を主に3人の調査員で爬虫類5種、両生類6種について前回の調査のデータを基に昼間及び夜間の現地調査や周辺住民からの聞き取り調査を行った。

① 爬虫類

爬虫類の調査対象種は、準絶滅危惧(NT)がニホンイシガメ、タワヤモリ、ニホントカゲの3種と、情報不足(DD)がニホンスッポンとタカチホヘビの2種である。

ニホンイシガメは前回同様、小豆島町及び土庄町の限られた区域のため池で生息を確認することができた。周辺環境に変化はないが、クサガメとの雑種が確認されたことから定期的な調査を継続する必要がある。タワヤモリは、今回もアカマツ林やウバメガシ林等比較的乾燥した自然海岸の岩場もしくはその周辺において生息が確認された。人家に近い場所では、ニホンヤモリとの交雑種が多く確認された。ニホントカゲは、山間部もしくは山間部に近い平野部で生息が確認された。かつて生息していた平野部の民家周辺では生息を確認することができなかった。ニホンスッポンは、中・西讃地区の河川及び沼池において生息確認や目撃情報を得ることができた。聞き込み情報では、かつての養殖池から逃げ出した個体が繁殖していると推察できる場所が多い。タカチホヘビは、今回の調査では12箇所て19個体の生息確認となり、前回調査と比して大幅に増加した。調査の積み重ねにより生態や生息環境の解明が進んだ結果である。

② 両生類

両生類の調査対象種は、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)がナゴヤダルマガエル1種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)がセトウチサンショウウオとイシヅチサンショウウオの2種、準絶滅危惧(NT)がニホンヒキガエル、トノサマガエル、アカハライモリの3種である。今回新たにアカハライモリを調査対象種としたのは、環境省のレッドリストに挙げられたことと、これまで香川県での生息記録が少ないためである。

ナゴヤダルマガエルの生息分布の調査記録は、昭和47(1972)年の小豆島や豊島での記録が最後である。前回の調査で塩江町の水田でナゴヤダルマガエルの幼体と推察できる個体が4個体見つかったが、成体の生息は確認できなかった。今回も調査を継続したが、生息を確認することはできなかった。県内のナゴヤダルマガエルは絶滅した可能性が否定できない。セトウチサンショウウオは、前回の調査同様、讃岐平野に点在する各種溶岩をのせた五剣山や五色台、琴平山などの山麓一帯の湧水や小さなため池、山際の水田周辺に生息しているに過ぎない。イシヅチサンショウウオは、前回の調査で、土器川、香東川、財田川、柞田川、綾川の標高約500m以上の溪流に生息していることが確認された。今回再調査を行ったが、台風等の大雨で各河川の上流の溪流が土砂崩れ等で荒れ、生息環境が悪化している地点も見られた。ニホンヒキガエルは、前回の調査では中山間地や島嶼部の限られた小さなため池を産卵場所とし、その周辺でわずかに確認されていた。今回の調査では、産卵池でウシガエルの幼生が多数生息し、ニホンヒキガエルの卵を捕食する様子が確認された。今後、急速に個体数が減少すると考えられる。トノサマガエルは昭和40(1965)年頃には県内の平野部にある水田地帯に広く生息していた。前回の調査同様、標高100m以上の水田や小豆島・豊島では生息を確認することができた。近年、急速に耕作放棄水田が増え、生息環境の悪化に伴う個体数の減少が推察される。アカハライモリは、これまで生息記録が少なく、生息分布が断片的にしか捉えられていなかった。今回の調査で中山間地の用水路や水田周辺で確認されたが、平野部での生息は確認されなかった。

(篠原 望)

ニホンイシガメ <i>Mauremys japonica</i> (イシガメ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選定理由	⑤⑥※ 2001年、聞き込み情報をもとに現地調査を実施し、香川県で初めて生息確認ができた。現在、小豆島以外では確認されていない。		 <p>被写体: 土庄町 撮影者: 篠原 望</p>
種の特徴	甲長は雄で約120mm、雌で約180mmである。背甲は褐色でクサガメのような顕著な3本の隆起は存在しない。背甲の後縁がギザギザであり、老齢個体になると丸みを帯びてくる。和名が変更されイシガメからニホンイシガメとなった。		
分布	県内: 小豆島町, 土庄町 県外: 本州, 四国, 九州とその周辺の島		
県内での生息状況	土庄町の標高約100m 前後の家庭排水が流入しない溜池や沼などに生息する。生息地は溜池や沼に隣接して落葉広葉樹が広がっている。		
絶滅危険性の要因	生息場所の溜池や沼の改修工事が行われると、生息環境が悪化する可能性がある。土地開発等で住宅などができた場合、家庭排水が生息地の溜池や沼に流れ込む危険性もある。近縁種のクサガメが周辺地区で多数確認されているため、今後、個体数の多いクサガメとの間で雑種ができる可能性がある。		
特記事項	愛媛県: 絶滅危惧Ⅱ類(VU), 高知県: 注目種, 徳島県: 絶滅危惧ⅠBほか, 30都府県で指定されている。		
文献	2,3,4,5,23,24		
	執筆: 篠原 望		

ニホンスッポン <i>Pelodiscus sinensis</i> (スッポン科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	情報不足 (DD)
選定理由	⑧※ 生息状況を把握できるだけの情報が集まっていないため注目が必要である。		 <p>被写体: 丸亀市 撮影者: 秋山敬典</p>
種の特徴	甲長は約200～300mmである。甲らには鱗板がなく、柔らかな皮膚に覆われている。水かきがよく発達し、爪が鋭い。頭部の鼻先が前方に大きくせり出しているのも特徴である。和名が変更されスッポンからニホンスッポンとなった。		
分布	県内: 高松市, 丸亀市, さぬき市, 三豊市, 観音寺市, 綾川町の河川及びため池 県外: 本州, 四国, 九州とその周辺の島		
県内での生息状況	現在の生息確認地点は、二級河川での確認が多かった。かつての養殖池から逃げ出したものが成長した可能性が高いと考えられる。河川改修中に捕獲されたり、食用として捕獲したことによる情報が多くなっている。河川中流域や公園内の池で自然繁殖が確認された地点もある。		
絶滅危険性の要因	現在、生息が確認されている河川の多くで自然災害やその防止のための河川改修等が行われ、川底の砂泥質が流されたり、取り除かれたりし、生息環境が大きく変化している。溜池の堤の改修による水環境の変化も大きい。食用として利用されるため、捕獲の危険に絶えずさらされている。		
特記事項	愛媛県・高知県: 情報不足 (DD), 徳島県: 留意ほか, 24都府県で絶滅危惧種に指定されている。		
文献	2,3,4,5,16,21		
	執筆: 篠原 望		

タワヤモリ <i>Gekko tawaensis</i> (ヤモリ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選定理由	①⑥⑧※ 本種はさぬき市多和が模式産地とする日本固有種である。生息環境の悪化・減少に伴い生息数を減少させているとともに近縁種との交雑も懸念される。		 <p>被写体: 高松市 撮影者: 安森盟文</p>
種の特徴	全長は90～120mm。背面は雲状斑紋の灰褐色または茶褐色。頭部は扁平で、ニホンヤモリとは異なり、胴背部の大型鱗を欠き、雄でも前肛孔を持たない。		
分布	県内: 瀬戸内海沿岸部, 島嶼部, 讃岐山脈の一部 県外: 本州, 四国, 九州の瀬戸内海沿岸と周辺島嶼部及び四国の太平洋沿岸		
県内での生息状況	瀬戸内海沿岸部, 島嶼部, 讃岐山脈, 平野部に点在している溶岩台地のうちウバメガシやアカマツが多く生え比較的乾燥している露岩場の割れ目や隙間が多い場所を中心に生息している。		
絶滅危険性の要因	沿岸部等の岩場が繁殖及び冬眠等を含む全生活史の基盤となる生息環境である。森林開発, 自然海岸の改変, 道路建設等により、生息環境の悪化と減少がみられる。本種の生息域に侵入しつつあるニホンヤモリとの交雑による純系個体が減少している。		
特記事項	愛媛県: 準絶滅危惧(NT), 高知県: 情報不足, 徳島県: 絶滅危惧Ⅱ類ほか, 8府県で絶滅危惧種に指定。		
文献	1, 2,3,4,5,6,8,9,10,11,13,15,16,17,18,19,20,21,22,23,25,26,27,29,31,32		
	執筆: 安森盟文		

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ニホントカゲ <i>Plestiodon japonicus</i> (トカゲ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑧*	本種は日本固有種であり分布圏内の多くの府県で生息数が激減している。当県においても生息環境の減少や悪化等から生息数が減少している。	
種 の 特 徴	全長は200～250mmで頭胴長は60～95mm。幼体は背面が黒色で明褐色の5本の縦条があり尾は鮮青色である。成体は全身が茶褐色となる。鱗は滑らかで光沢がある。		
分 布	県内: 島嶼部, 平野部の山麓, 山間部 県外: 近畿以南の本州, 四国, 九州とその周辺島嶼部。		
被写体:	高松市	撮影者:	秋山敬典
県 内 で の 生 息 状 況	かつては県内各地の広範囲に生息していた。現在では平野部では草原や河川敷の荒廃や減少により生息数を減らしている。特に民家周辺では建築構造等の変化に伴いその姿を見ることは極めて稀である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	草地の減少, 農地改修, 土地造成による本種の餌となる昆虫類や小動物の減少及び生息環境の荒廃と減少。ニホンカナヘビとの種間競争による影響, 増加しているイノシシによる捕食圧。		
特 記 事 項	9都府県で絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	3,4,10,11,12,14,16,17,18,19,20,21,22,23,25,26,27,29,30,32	執筆: 安森盟文	



タカチホヘビ <i>Achalina spinalis</i> (タカチホヘビ科)		香川県カテゴリー	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑧*	本種は酷似した環境の隣接分布域内でも極めて限られた範囲のみに生息し, 生息環境の僅かな変化にも極めて敏感である。	
種 の 特 徴	全長は300～600mm。幼体時は暗褐色で, 成長に従い黄褐色に変わる。背面中央には黒色縦条が入る。他のヘビと異なり, 背面の体鱗は重ならず, 尾下板は単一で対をなさない。ナミヘビ科タカチホヘビ属の分類が見直され, 科・属が変更された。		
分 布	県内: 平野部の山麓, 山間部 県外: 本州, 四国, 九州とその周辺島嶼部		
被写体:	高松市	撮影者:	安森盟文
県 内 で の 生 息 状 況	かつては平地の水田の畦道でも生息が確認されていた。現在では, 半日影で夏季でも高温になりにくく一定の湿度を保持した山間部寄りの平野もしくは山間部の落ち葉が堆積した林床において, 落ち葉の下や倒木の下で半地中性的に生息している。上記の分布域内であっても, 実際に生息しているのは極めて局所的である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林伐採, スギヒノキ等の造林, 河川やため池の堤のコンクリート化, 道路工事, 土地造成, 圃場整備, 自然遷移による生息環境の悪化と減少。増加しているイノシシによる捕食圧。		
特 記 事 項	愛媛県・高知県: 情報不足, 徳島県: 準絶滅危惧 (NT)ほか, 34都府県で絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	2,3,4,16,17,18,19,20,21,22,26	執筆: 安森盟文	



セトウチサンショウウオ <i>Hynobius setouchi</i> (サンショウウオ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	⑧*	丘陵地の水田や湧水, 小規模な溜池等で卵囊や成体が確認されていた。現在は, 生息範囲が限られ, 個体数が減少している。	
種 の 特 徴	全長約70～120mmで, 体色は変異があり淡褐色の個体が多い。腹面は, 淡黄色または灰色で尾の上下両縁に黄条がある。基色上に銀白色の地衣状の斑点が散在する。学名が変更され, 和名がカスミサンショウウオからセトウチサンショウウオとなった。		
分 布	県内: 讃岐平野に点在する各種溶岩をのせた山塊群(五剣山, 五色台等)の山麓や県南部の丘陵地 県外: 瀬戸内地方の東部に分布		
被写体:	坂出市	撮影者:	篠原 望
県 内 で の 生 息 状 況	成体は丘陵地の落葉広葉樹林や竹やぶの浅い地中, 落葉や倒木の下などに生息している。丘陵地の水田の溝, 湧水, 管理放棄された水田の水溜まりや小さい溜池等が産卵場所となっている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	丘陵地の森林・土地開発, 水田の耕作放棄, 林道工事, 小規模の溜池の管理放棄等により生息環境が減少している。農業や生活排水がもたらす水質汚染や産卵場所の富栄養化のため水質が悪化し死滅している卵囊も見られる。今後, 多くの地点で絶滅することが考えられる。		
特 記 事 項	徳島県: 絶滅危惧II類(VU)ほか, 4県で絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,12,13,14,15,17,18,21,22,23,24,26,27,29,30,31,32,35,36	執筆: 篠原 望	



※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

イシヅチサンショウウオ <i>Hynobius Hirosei</i> (サンショウウオ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)	
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑧※ 生息場所及び産卵場所において、生息個体数・卵数数が少ない。生息場所及び産卵場所が局限されている。生息環境が悪化しているところが多い。			
種 の 特 徴	全長160～200mmと大型で、体色は青みを帯びた黒色で斑紋がない。卵は直径が5mmほどあり、ほとんど色素がなく淡黄色である。幼生の多くは越冬して翌年に変態する。学名、和名がオオダイガハラサンショウウオから変更された。			
分 布	県内：讃岐山脈に源流をもつ財田川、土器川、香東川の上流域 県外：四国地方の山地に分布			被写体：高松市 撮影者：篠原 望
県 内 で の 生 息 状 況	生活排水や農薬等の流入がない標高500～700mの落葉広葉樹林、スギ、ヒノキ植林地の渓流及びその周辺の岩石や倒木、落葉などの下等に生息している。産卵は比較的大きい岩の下などに産みつけられている。今回の調査では柞田川、綾川で生息の確認ができなかった。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息地の森林伐採、風水害による渓流の水環境の消滅、砂防ダム等の河川改修、林道等の道路工事による開発、キャンプ地の生活排水による水質汚濁によって生息環境が減少している。寒冷地の野菜栽培による農薬汚染が生育条件、生息条件の悪化をもたらしている。			
特 記 事 項	愛媛県：絶滅危惧II類(VU)、高知県・徳島県：準絶滅危惧(NT)で絶滅危惧種に指定されている。			
文 献	4,5,6,10,18,20,29,32			執筆：篠原 望

アカハライモリ <i>Cynops pyrrogaster</i> (イモリ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑧※ 本種は日本固有種であり近年全国的に生息数が激減している。当県においても生息環境の減少や悪化等から生息数が減少している。			
種 の 特 徴	全長は70～140mm。背面は黒色または暗褐色、腹面は赤色またはオレンジ色に黒色の不規則な斑紋がある。尾は極度に側偏し、雌雄多型が著しい。表皮には強い神経毒を有している。			
分 布	県内：島嶼部を除く平野部の山麓及び山間部 県外：本州、四国、九州とその周辺島嶼部			被写体：さぬき市 撮影者：安森盟文
県 内 で の 生 息 状 況	かつては平野部から山間部に至る池や沼、水田、石積みの水路などに広く分布していた。現在では綺麗な水が流入する山間部もしくは山間部寄りの平野部の水田、池、水路で生息が確認されている。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河川の改変、ため池の改変、湿地の改変、農地改修、農薬汚染、水質汚濁、ため池や用水路の管理放棄による生息環境の悪化と減少。近年増加しているサギ類やイノシシによる捕食。			
特 記 事 項	愛媛県・徳島県：準絶滅危惧(NT)、高知県：注目種(ま)、26都府県で絶滅危惧種に指定されている。			
文 献	1,2,3,5,6,11,15,17,18,21,22,23,24,25,29,30,31,32			執筆：安森盟文

ニホンヒキガエル <i>Bufo japonicus</i> (ヒキガエル科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリ	—	
選 定 理 由	⑧※ 本種は日本固有種であり分布圏内の多くの府県で生息数が激減している。当県においても生息環境の減少や悪化等から生息数が減少している。			
種 の 特 徴	体長は70～150mm。背面は幼体時は黒褐色で成長に伴い茶褐色となる。背面全体にイボ状突起があり、圧迫すると毒液を出す。頭部は長さより幅が広く、四肢は太短い。			
分 布	県内：島嶼部、平野部の山麓、山間部 県外：近畿以南の本州、四国、九州とその周辺島嶼部			被写体：三木町 撮影者：安森盟文
県 内 で の 生 息 状 況	かつては山間部から平野部の人家周辺に至るまで広範囲に生息していた。現在では、産卵地及び生息環境の荒廃・減少により、限られた範囲の山間部・山麓・一部の島嶼部で生息している程度で、急激に個体数が減少している。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、ため池の改変、湿地の改変、ダム建設、道路建設、土地造成による成体生息環境の荒廃と減少。農薬汚染、水質汚濁、ため池等の管理放棄による産卵場所の荒廃と減少。イノシシ及びウシガエルによる幼体の捕食圧。			
特 記 事 項	愛媛県・徳島県：準絶滅危惧(NT)ほか、18府県で絶滅危惧種に指定されている。			
文 献	1,2,3,4,5,11,15,16,17,18,19,21,22,23,24,25,28,29,30,31,32,39,40,41,42			執筆：安森盟文

※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

トノサマガエル <i>Pelophylax nigromaculatus</i> (アカガエル科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑧*	1960年代までは水田地帯に広く分布していた。近年、稲作の水管理の変化や農地及び用水路の改変により、平野部で個体数が激減している。		
種 の 特 徴	中型のカエルで体長は約60～90mmである。雌雄で体色に差があり、雄は全体に緑色の部分が多く、雌は全体に白っぽい。背中には不規則な黒い斑点と1本の縦筋がある。			
分 布	県内: 山間部の水田, 島嶼部(小豆島, 豊島)の水田, 小さな溜池, 河川及びダムの上流等 県外: 本州(関東平野, 仙台平野を除く), 四国, 九州, 北海道と対馬(人為移入)		被写体: 土庄町	撮影者: 篠原 望
県 内 で の 生 息 状 況	主に山間部の山際及び谷間の水田周辺, 島嶼部の限られた水田で生息が確認されている。平野部で標高100m以下の地域(東かがわ市を除く)の水田で生息を確認することはきわめて困難になっている。生息範囲は限定されつつある。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	水田地帯の河川・溜池の改修や農地の乾田化に伴う水環境の激変が個体数の減少をもたらしたと考えられる。苗代の廃止やイネの品種の変化にともなう中干しの強化も併せて考えておく必要がある。			
特 記 事 項	愛媛県: 絶滅危惧II類(VU), 徳島県: 絶滅危惧I B類(EN)ほか, 22府県で指定されている。			
文 献	3,4,5,6,11,15,17,18,21,22,23,24,25,29,30,31,32,33,34,37		執筆者: 篠原 望	

ナゴヤダルマガエル <i>Pelophylax porosus brevipodus</i> (アカガエル科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I B類 (EN)	
選 定 理 由	⑤⑥⑧*	2000年8月, 塩江町の谷間の低湿地で幼体が確認されたのみで, 過去の生息地を含め, 成体は現在も確認されていない。		
種 の 特 徴	トノサマガエルに似ているが, 体長は約50～60mmで腹部が大きく膨らんでいる。背に明瞭な縦筋がなく, 黒斑が大きく独立している。腹部にダルマ斑紋と呼ばれる小さな黒斑がある。学名が変更され, 和名がダルマガエルからナゴヤダルマガエルとなった。			
分 布	県内: 高松市 県外: 中部地方南部, 東海, 近畿北部・中部, 北陸, 瀬戸内海地方		被写体: 高松市	撮影者: 篠原 望
県 内 で の 生 息 状 況	2000年8月, 高松市塩江町の谷間の低湿地で幼体が4個体確認された。その後, 低湿地が乾田化されたり, 耕作放棄されたりして水環境が大きく変化したため, その後の生息確認が困難になっている。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	過去の生息地を含め再発見地でも, 水田の乾田化が進み, 1年を通して水が浅くたまる環境が消失している。近縁種のトノサマガエルとの交雑も大きな問題である。今回の調査でも, 土庄町豊島でトノサマガエルと交雑したと推察される個体が確認されている。			
特 記 事 項	愛媛県: 絶滅危惧 I 類(CR+EN)ほか, 13府県で絶滅危惧種に指定されている。			
文 献	1,4,5,6,7,29		執筆者: 篠原 望	

※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

◎ 爬虫類 ◎

文 献

- 1 香川県. 1990. 香川県自然環境保全計画.
- 2 香川県. 1990. 香川県自然環境保全計画-資料編.
- 3 香川県. 2004. 香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物.
- 4 香川県高等学校生地部会. 2007. 香川の生物. 平成19年度日本生物教育会第62回全国大会香川大会大会誌記念誌.
- 5 環境省. 2014. レッドデータブック2014 3 爬虫類・両生類 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物―.
- 6 環境庁. 1982. 第2回自然環境保全基礎調査報告書(緑の国勢調査).
- 7 環境庁. 1998. 種の多様性調査(動物分布調査).
- 8 川田英則. 1980. 香川県下のタワヤモリ. 香川県自然科学館研究報告2: 9-16.
- 9 川田英則. 1980. 櫃石島および与島周辺地域における淡水魚類, 両生類および爬虫類について. 昭和54年度一般国道30号(香川県側)自然環境調査報告書: 47-60.
- 10 川田英則. 1981. 土器川水系における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書: 83-91.
- 11 川田英則. 1981. 両生・は虫類の分布からみた土器川水系の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(土器川水系): 167-170.
- 12 川田英則. 1981. 国市池における淡水魚類・両生類・爬虫類に関する基礎調査. 国市池調査報告書: 51-58.
- 13 川田英則. 1981. 香川県におけるヤモリ類2種の分布-粟島でのニホンヤモリとタワヤモリの生息場所を中心として. 香川県自然科学館研究報告3: 9-16.
- 14 川田英則. 1981. 聖通寺山, 角山周辺の両生・爬虫類および与島のヒキガエル. 昭和55年度一般国道30号(香川県側)自然環境調査報告書: 39-46.
- 15 川田英則. 1982. 新採捕地を含めたタワヤモリの分布域に関する一定説. 香川県自然科学館研究報告4: 1-8.
- 16 川田英則. 1982. 香川県の爬虫類. 香川生物(10): 29-33.
- 17 川田英則. 1982. 両生・は虫類の分布からみた綾川・金倉川水系の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃西部地域): 355-358.
- 18 川田英則・多田敬三. 1982. 綾川・金倉川水系における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃西部地域): 231-242.
- 19 川田英則・篠原望. 1985. 香川県中讃東部地域における両生・爬虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃東部地域): 183-193.
- 20 川田英則・篠原望. 1985. 香川県中讃東部地域における両生・爬虫類の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃東部地域): 298-302.
- 21 川田英則・篠原望. 1986. 香川県東讃地域における両生・爬虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県東讃地域): 159-174.
- 22 川田英則・篠原望. 1986. 両生・爬虫類の分布からみた香川県東讃地域の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県東讃地域): 285-290.
- 23 川田英則・篠原望. 1987. 香川県小豆島地域における両生・爬虫類の分布について. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県小豆島地域): 110-120.
- 24 篠原望. 2001. 香川県のインガメ *Mauremys japonica*. 香川生物(28): 23-25.
- 25 篠原望・川田英則. 1987. 新川水系のため池における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(新川水系のため池): 43-52.
- 26 篠原望・川田英則. 1988. 両生・は虫類の分布からみた香川の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(自然度評価の総括): 61-71.
- 27 篠原望. 1994. 大滝大川県立自然公園地域の両生・爬虫類. 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観(9): 1-9.
- 28 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎. 2002. 決定版日本の両生爬虫類. 平凡社.
- 29 植松辰美. 1980. 与島および櫃石島における陸上動物調査結果の概要. 昭和54年度一般国道30号(香川県側)自然環境調査報告書: 3-6.
- 30 植松辰美. 1988. 高松市三谷剣山塊の魚類, 両生・爬虫類および甲殻類・水生軟体動物. 高松市三谷剣山塊動植物現況調査報告書: 15-29.
- 31 植松辰美・川田英則・篠原望. 1988. 与島におけるヒキガエル(4) 1987年度の調査. 昭和62年度Dルート自然環境モニタリング調査報告書: 263-269.
- 32 植松辰美・金子之史・川田英則・篠原望・田中俊彦. 1990. 与島におけるヒキガエル(54) 1989年度の調査. 平成元年度Dルート自然環境モニタリング調査報告書: 263-274.

◎ 両生類 ◎

文 献

- 1 香川県. 1989. 香川県自然環境保全計画策定調査報告書.
- 2 香川県. 1990. 香川県自然環境保全計画.
- 3 香川県. 1990. 香川県自然環境保全計画—資料編.
- 4 香川県. 2004. 香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物.
- 5 香川県高等学校生地部会. 2007. 香川の生物. 平成19年度日本生物教育会第62回全国大会香川大会大会誌記念誌.
- 6 環境省. 2014. レッドデータブック2014 3 爬虫類・両生類 —日本の絶滅のおそれのある野生生物—.
- 7 環境庁. 1982. 第2回自然環境保全基礎調査報告書(緑の国勢調査).
- 8 環境庁. 1985. 香川西部地区モデル定住圏における自然公園等の活用に関する調査報告書(緑の国勢調査).
- 9 環境庁. 1988. 第3回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書両生類・爬虫類.
- 10 環境庁. 1993. 第5回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書.
- 11 環境庁. 1998. 種の多様性調査(動物分布調査).
- 12 榎原大明. 2009. 香川県産カスミサンショウウオの産卵に水深が及ぼす影響 -水深から考える保護方法-. 香川大学大学院教育学研究科修士論文.
- 13 川田英則. 1967. 香川県下のカスミサンショウウオ(第I報). 香川大学教育学部附属坂出中学校理科記要1:1-8.
- 14 川田英則. 1968. 香川県下のカスミサンショウウオ(第II報). 香川生物(4):6-7.
- 15 川田英則. 1974. 香川県の両生類. 香川大学教育学部附属坂出中学校研究報告1(4):13-16.
- 16 川田英則. 1980. 櫃石島および与島周辺地域における淡水魚類, 両生類および爬虫類について. 昭和54年度一般国道30号(香川県側)自然環境調査報告書:47-60.
- 17 川田英則. 1981. 土器川水系における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書:83-91.
- 18 川田英則. 1981. 両生・は虫類の分布からみた土器川水系の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(土器川水系):167-170.
- 19 川田英則. 1981. 聖通寺山・角山周辺の両生・爬虫類および与島のヒキガエル. 昭和55年度一般国道30号(香川県側)自然環境調査報告書:39-46.
- 20 川田英則. 1992. 香川県琴南町で報告されたカスミサンショウウオはオオダイガハラサンショウウオ. 香川生物(19):111-112.
- 21 川田英則・多田敬三. 1982. 綾川・金倉川水系における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃西部地域):231-242.
- 22 川田英則・篠原望. 1985. 香川県中讃東部地域における両生・爬虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県中讃東部地域):183-193.
- 23 川田英則・篠原望. 1986. 香川県東讃地域における両生・爬虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県東讃地域):159-174.
- 24 川田英則・篠原望. 1986. 両生・爬虫類の分布からみた香川県東讃地域の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県東讃地域):285-290.
- 25 川田英則・篠原望. 1987. 香川県小豆島地域における両生・爬虫類の分布について. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(香川県小豆島地域):110-120.
- 26 松本一範・榎原大明・篠原望. 2012. カスミサンショウウオの産卵に影響を及ぼす産卵場所の環境要因. 香川生物(39):83-91.
- 27 松本一範・久米竜一・末次将也. 2017. 香川県内におけるカスミサンショウウオの産卵状況. 香川生物(44):61-66.
- 28 篠原望. 1992. 香川県高松市女木島・男木島におけるヒキガエル. 香川生物(19):41-44.
- 29 篠原望. 2000. 香川県の両生類—RDB 調査に向けて. 千葉中央博自然誌研究報告特別号(3):43-49.
- 30 篠原望・川田英則. 1987. 新川水系のため池における両生・は虫類の分布. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(新川水系のため池):43-52.
- 31 篠原望・川田英則. 1988. 両生・は虫類の分布からみた香川の自然度. 香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(自然度評価の総括):61-71.
- 32 篠原望. 1994. 大滝大川県立自然公園地域の両生・爬虫類. 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観(8):1-10.
- 33 篠原望. 2005a. 香川県におけるトノサマガエルの現在の分布. 香川県自然科学館研究報告(25) 長期研修生の部:1-4.
- 34 篠原望. 2005b. 香川県平野部におけるトノサマガエルの激減の原因に関する一考察. 香川県自然科学館研究報告(25) 長期研修生の部:5-12.
- 35 篠原望. 2006a. 香川県におけるカスミサンショウウオの現在の分布. 香川県自然科学館研究報告(27) 長期研修生の部:1-4.
- 36 篠原望. 2006b. 香川県におけるカスミサンショウウオの生息環境の分析. 香川県自然科学館研究報告(27) 長期研修生の部:5-12.
- 37 篠原望. 2007. 圃場整備がトノサマガエルの生息に及ぼす影響. 香川生物(34):97-105.
- 38 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎. 2002. 決定版日本の両生爬虫類. 平凡社.
- 39 内山りゅう他. 2007. 今、絶滅のおそれのある水辺の生き物たち. 山と溪谷社.

- 40 植松辰美. 1980. 与島および櫃石島における陸上動物調査結果の概要. 昭和54年度一般国道30号（香川県側）自然環境調査報告書：3-6.
- 41 植松辰美. 1988. 坂出市与島におけるヒキガエル個体群年変化（1979-1988）. 香川生物（15・16）：75-80.
- 42 植松辰美・川田英則・篠原望. 1988. 与島におけるヒキガエル（4）1987年度の調査. 昭和62年度D ルート自然環境モニタリング調査報告書：263-269.
- 43 植松辰美・金子之史・川田英則・篠原望・田中俊彦. 1990. 与島におけるヒキガエル（5）1989年度の調査. 平成元年度D ルート自然環境モニタリング調査報告書：263-274.